

松阪市子ども支援研究センターだより

松阪市子ども支援研究センター〈TEL. 26-1900 FAX. 26-1901〉

E-mail: kyo.div@city.matsusaka.mie.jp <http://www.city.matsusaka.mie.jp>

松阪教育支援センター「鈴の森教室」「三雲やまゆり教室」

〈TEL 26-1900 FAX 26-1901〉 E-mail: suzunomori@matsusaka.ed.jp



「言葉が力になる」



秋が深まり肌寒さを感じる季節としました。それぞれの園・学校では、文化祭等の行事に向けてお忙しい日々をお過ごしのことと存じます。また、各園・学校におかれましては、園内・校内の研修を深めていただく時期となり、それぞれに保育研究や授業研究に取り組まれていることと思います。

この季節になると「読書の秋」という言葉をよく耳にします。10月1日に「平成30年度全国学力・学習状況調査」における松阪市の結果分析が、松阪市のホームページにおいて公表されました。調査結果の分析によると、読書時間に関して、「1日当たり30分以上読書する」児童・生徒の割合が、昨年度より上昇しているものの全国を下回っており、課題があることが示されています。子どもたちの読書の様子はいかがでしょうか。

「魔女の宅急便」等の作者として知られる児童文学作家の角野栄子さんが、今年の3月26日に、「国際アンデルセン賞」作家賞に選ばれました。この賞は、児童文学のノーベル賞と言われる、長年子どもの本に貢献した作家や画家に贈られるもので、2年に一度国際児童図書評議会が選考するそうです。角野さんは受賞のスピーチで、心に残る素敵なメッセージを残してくださっています。

“読書が子どもたちにもたらすもの”について

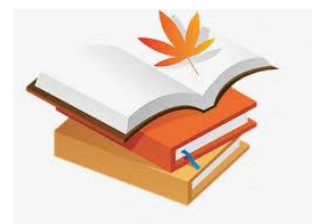
「物語は読んだ瞬間から読んだ人一人ひとりの物語になり、読んだ人の力と相まって広がっていくのが物語の素晴らしいところです。」

「まず言葉だろうと思う。読んで読んで読むことで、その人の中にその人の辞書ができていく。その言葉はその人が生きていく上での力になる。本を読んで感動すると何かを作り出したいくなる。創造に結びついていく力が読書にはあると思います。」

話が少し変わりますが、平成30年4月に、第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」が定められました。第三次同計画の取組から、現状として児童用図書の貸出冊数の増加や全校一斉読書活動を行う学校の割合が増加した一方、中学生までの読書習慣の形成が不十分であることや小中学生の不読率は中長期的には改善傾向にあるが、高校生の不読率は依然として高いことが課題としてあげられています。

これらのことを踏まえ第四次計画では、①発達段階に応じた取組により、読書習慣を形成すること、②友人同士で行う活動等を通じ、読書への関心を高めることが、推進のための主な方策とされています。

各学校においては、すでに児童生徒の読書への関心を高める取組を行って見えることと思います。それらを継承しつつ、児童生徒のより主体的、意欲的な読書活動の充実に向けて取り組むことで、子どもたちにたくさんの言葉の辞書を作っていけたらと思います。



(野田 幸範)

研修講座報告その3～研修講座の様子をご紹介します！～

B-5 郷土教育「郷土の偉人に学ぶ教育の実践から」講師 松本 吉弘 先生
門 暉代司 先生

それぞれの講師から、三井高利と松坂について、これまでの実践から、「三井高利とはどんな人か」「松坂や全国のゆかりの地」「三井高利と越後屋商法」そして今後の「授業づくり」について、それぞれ詳しくご教授いただきました。



B-8 人権教育Ⅰ 「ともに生きる社会を創る」～ 障害者差別解消法をふまえて～
講師 垣内 秀文 先生

障害者差別解消法に関する基礎的なことや合理的配慮について様々な観点から幅広く教えていただきました。グループワークを通して、障害を個人のものとしせず、相手の立場に立って、社会全体のものとして考えていくことの大切さを学ぶことができました。



B-13 生徒指導Ⅲ 「Q-U を活用した学級づくり」～分析と対策～ 講師 青木 俊幸 先生

Q-U の分析と考察の仕方、それに基づく対策の立て方などについて幅広く教えていただきました。ペアで教職員同士が分析結果や意見を交換しあうことで、客観的に各学級の様子を把握することができ、学級の特徴などを細かく分析することができました。



B-15 特別支援教育 「トラウマと愛着表現について」
～人とのかかわりの影響はそのあとも続く～ 講師 志村 浩二 先生

日々の教育実践において教員が直面することのある状況の原因や対応策などについて、具体的な事例とロールプレイを通してわかりやすく教えていただきました。子どもと同じように、保護者の抱えている課題にも一緒に向き合う必要性を考えました。

